「スクラッチを読んで」

三木市立緑が丘中学校　三年　森田七歩

私は、スクラッチを読んですぐに小学五年生から小学六年生の頃の事を思い出しました。

小学校生活最後の一年の始まりが分散登校で始まりました。臨時休校や分散登校になったとき初めのうちは正直千暁が思っていたように少しラッキーと思っていました。

ですが、時間が経つにつれて出かけることもできない、友達に会うこともできない悲しみや寂しさができました。その我慢がしんどくなり、家族に対して私も鈴音のような不機嫌爆弾になっていたんだろうなと今になっては思います。

小学校生活最後の一年間は例年以上に大切だと感じていました。だから、毎日のように「学校に行きたい。」と言うようになっていました。あまりにしつこい私に家族はイライラして「いいかげんにして。」と言われていたことを今でも覚えています。あの時は何が悪いのかよくわかっていなかったものの、この本を読み、あれは自分ことしか考えていないわがままな発言だったことに気づきました。

鈴音の大好きでがんばってきたバレーの試合がいつものように戦えずに終わってしまう悔しさや、千暁の得意な美術の展覧会がなくなった悲しさや苦しさにとても共感しました。

お互いしんどくて大変なことはわかっているけれど、それでもどこにぶつけたらいいのかわからない怒りが湧き続ける気持ちも痛いほどわかりました。

今は、前よりも「コロナ」という言葉を聞かなくなり、マスク制限がなくなるなど、コロナが流行る前に少しずつ近づいていると思います。以前に戻ってきている今、私はコロナに奪われてしまったことを忘れてしまっていたけれど、この本を読み、思い出すことができました。

四年前は当たり前だった友だちと机を近づけ、休日の出来事や家族のことを楽しく話しながら食べていた給食の時間が、放送されている曲と食器があたる音だけしか聞こえない。一人一人で静かに食べる寂しい給食に変わってしまったこと、前までは気にせず友だちに触れられていたのにできなくなったことなど全て制限に制限が重ねられていた生活を送っていました。

こんな生活が当たり前になってきたときに中学生になり、半分以上が初めて出会う人で、小学校の時と比べて人数がとても増えました。みんなマスクをつけているのでどんな顔をしているのか、どんな風に笑うのかマスクのせいで、コロナのせいでわかりませんでした。マスクが体の一部になって、マスクが外せないので「マスク焼け」をしていたのも今では思い出です。

スクラッチを読み私達はコロナによっていろんなことを失い、補ってきたんだなと思いました。コロナ対策で行われたマスクの着用や病院で面会ができないなどが今の当たり前になったけれど、それは当たり前になってよかったことなのか、このまだ制限がなくならない生活でどう自分の色を出していくのかが問われてい

るのではないかと感じました。スクラッチアートのように今のこの制限されているコロナ禍という世間が黒色というなら、千暁がしたように黒色を自分達の力で削り取って自分達の色を出していくことができたら今まで以上に楽しく、そして成長していけると思います。

鈴音の運動神経のいいところや明るく元気なところ、千暁の頭の良いところや優しいところなどそれぞれの長所がさらにコロナという壁を乗り越えるための力になっていったと思いました。だから、何か悪い事があってもそれを乗り越えたときさらによくなった自分に出会えるのだと知りました。

スクラッチは、四年前に感じた私の悔しさや苦しみ、悲しみをもう一度思い出させてくれました。けれど、それだけでなく、他に気づいたこともあります。それは、コロナ禍で制限された生活でも楽しかったことです。もちろん、満足していたわけではありません。ですが、休校期間中いつも以上に家族と時間を過ごせたり、普段はあまりしない電話を友達としたりなど楽しいこともいっぱいありました。

そこで私は気づきました。生活を楽しく、明るいものにするのは環境ではなく、自分自身だということです。環境も大切だけれどそれはごく一部であり、自分の力で毎日を彩っていけるのだとこの本を読みわかりました。

だからこそ、三年前の不安でいっぱいだった私に絶対に楽しい生活が待っているから、自分なりの今を楽しむことをしてほしい、と伝えたいです。

これからきっと楽しいだけでは乗り越えられないこともあると思います。そんな時はこのスクラッチを読み返し、「自分らしさ」を忘れないようにします。先のことは何もわからないけれどそれでも前に進みたいと思う本でした。私達の青春はコロナに負けません。